



近藤忠義編

日本文學入門

日本評論社版



昭和15年8月31日第1版第1刷發行
昭和24年9月20日第1版第4刷發行

日本文學入門

定價 300 圓

編者 比 佐 藤 忠 義

發行者 吉 三 男 木 鈴

發售所 東京都中央區京橋3丁目4番地

株式會社 日本評論社

出協會員A114008號

電話京橋(56)6191—4番

振替東京16番

印刷 凸版印刷株式會社

製本 大光堂製本部

序に代へて

最近、讀書界・出版界の未曾有の活況が謳はれてゐるのであるが、國文學の名に呼ばれる日本古典文學關係の出版の異常な成功も、やはりそれと同じ根據に立つものかどうか、といふ點については稍々疑ひなきを得ない。

一體、昨今見られる一般讀書界の盛況の根柢には「われら如何に生くべきか」といふ、社會狀勢の急迫がおのづから知識大衆の裡に課題したところの、切實な生活的な探求の努力が、脈々として横たはつてゐるやうに思はれる。人々は先づ何かしら物を、能ふ限り確かに「知る」ことによつて、この朦朧たる、或は明確なる、不安から脱却して之を克服しようとする。特に今日の社會不安の性格を世界的に強く彩づけてゐるところの、反合理の滔々たる底流に對して、殊に然りである。時局あて込みの實際的著述ではなしに、たとへば科學に關する、歴史に關する、まじめな書籍の壓倒的な賣行きは、一つには右の事情を物語るものであらう。

ところで、日本文學に關する出版の好況に對しても亦、右と同様の根據が考へられるであらうか。例へば宣長の「古事記傳」や白石の「讀史餘論」などの成功に對しては、如上の認定があてはまらうとも、諸種の口譯ものやその他の純文藝的な古典作品の賣行きに對しては、おのづから又別個の解釋が與へられねばならぬので

はないだらうか。一般的に言つて、これらの讀者は、歴史的過去を確實に歴史的に把握することによつて、おのが批判力を豊かにし、深刻なこの現實の不安を、積極的前進的に克服しようとする方向への努力を採らず、或は感傷的な懐古に潛み入り、或は無批判な尙古に陶醉し、もしくは所謂「教養」といふ裝身具として之を身につける。かくして、吾等の遠き父祖の心骨を刻んだ勞作も、遂にその末裔どもの生の危機に際して、如何なる援助をも爲し得ぬものとなるのである。この時、わが「國文學」は、いま吾等の直面する「如何に生くべきか」の痛烈な、避け得ぬ、手づめの課題に對して、毫も關知する所なき無用の存在と化するのである。茲に、今日の一般讀書大眾とわが「國文學」との特殊な關係が注意せられる。

この苦烈にして困難な今日を生きぬくために、國文學は果して、吾々に寄與する何物をも持たぬのであらうか。勿論、斷じてさうではない。國文學を無用の長物たらしめるか否かは、實にそれを取扱ふ者の責任にかつてゐる。

尤も、古典文學から現代文學に涉る日本の作品には、共通の日本的とも言ひ得る一つの弱點が附き纏つてゐる。それは吾々が屢々論じて來てゐる謂はゞ、「中世的」な性格であり、この弱點は、作家と社會生活の問題、文學と人生との關係、文學制作者圈と享受者圈との關係、等々に於ける、傳統的な日本的な在り方の中から生じて來てゐる。日本文學に於ける構想力の貧しさ、視野の狭さ、思想性の低さ、等々の弱點は、正にその弱點のゆゑに、それと抱き合つて、一つの長所とも言ひ得る特殊な高度の創作技術を生長させた。そしてそれは、中世歌論の所謂「餘情」を醸出する技術であり、遠く王朝の「物のあはれ」以降、「幽玄」・「寂び」・「しをり」

等々はすべて此處に胎生するものである。又これらとは一應別個に、古今集時代以後の「ざえ」の系統が考へられるが、これとても社會性・思想性・批判性を持たぬ單なる「教養」・知的遊戯性に過ぎず、やはり日本文學の非社會的な在り方によつて育てられて來たものであることに變りはない。

そしてこの事情は、決して吾が古典文學のみに關するものではなく、明かに現代日本文學にも搖曳してゐる。明治維新の日本の性格は、文學に向つても、その近代的成長に中世的な傳統を隨伴せしめた。心境小説としての現代日本文學が、世界的水準を超えてゐると言はれるのも、屢次の非難・反省にも拘らず私小説的な構想が現代文學の血脈をなしてゐる事情も、作家の教養、思想的訓練の必要が屢々説かれねばならぬといふ事情も、すべて其處に起因するものである。

日本の文藝が抱く此の傳統的な弱點が、今日如何に生くべきかの途に迷ふ人々をして、とかく日本文藝を無力なものに感ぜしめることもなるのである。しかし、だからと言つて、それを日本文藝そのものの責任に歸するのは無責任であらう。學徒や作家・批評家が、或は舊い文獻學の中に閉ぢ籠り、或は放恣な鑑賞主義に遊ぶことを止めて、古典時代から今日に至る迄の日本文藝の抱く如上の弱點を率直に認め、その由つて來るところを、歴史的・社會的に攻究するならば、彼等はそこから今日の日本文藝の覆はれざる實體を見極め、明日の日本文藝への正しい見透しを獲る筈であり、更におのづから、文藝を通じて、如何に生くべきかの問題への根強い示唆と確信とを與へられる筈である。かゝることが可能であればこそ、文藝乃至文藝研究の不滅の意義があるのであつて、文學のこの巨大な意義を把へ得ず、今日この重大な時期に際して、人々の生くべき道から切

離して日本文學を考へ、而もその今日的意義を見得ない程の者は、學者・批評家・作家としての、又更に讀書人・知識人・文化人としての、眞の資格を有しない者に他ならぬであらう。

古典時代から現代に跨がる日本文藝の、思想性の低さと、正にそれに照應して生じた一定の高度な技巧との歴史的な相關を、——謂はば日本的な藝術主義の實體を、把へることなしに、日本文藝の美について語ることは甚だ危険である。しかるに、特定の美やそれを生むに至る技巧を、それらを規制する思想的土壤から、ほしい儘にもぎ離して問題とする態度が、傳統的に吾國の文藝批評の正統となつてゐるのである。これではしかし、結局は己れの嗜好に従つて美を語ることを意味するものでしかあり得ず、文藝の發展を客觀的に把へること、従つて古典研究を正しく現代に生かすこと、ひいては、如何に生くべきかの問題に文藝を參與せしめることが出來ず、要するに、眞の意味での文藝それ自體を把へることが遂に不可能に終るものであらう。素樸なものから手の込んだもの迄に涉る、ありとあらゆる鑑賞主義的文藝批評の、氣づかれざる缺陷がこゝに潛んでゐるのである。

元來、吾等の日本文藝を、特に困難な整理を必要とする古典文學を、國民大衆の享受の前に提供すべき任務をになふ國文學者は、その武器としての文獻學的方法を、凝結した一個の技術と化して學の本道から逸脱せしめ、國文學とは鬱陶しい學問であり、國文學者は古色蒼然たる存在であるといふ印象を與へて、大衆をして日本の文學を敬遠せしめ、又他方、前述の如き放恣な鑑賞主義と結びついて大衆を甘やかすに至つてゐる。これらの事情については、最近屢々述べて來てゐるから此處では繰返さぬこととする。

日本文學を日本國民全體の生の糧とするための道を誤つた責任の一半は、やはり國文學徒が負はねばならぬことを、吾等は虚心に認めねばならぬが、しかし責任は其處だけに在るのではない。己れたちの母國の文學を、己れたちの生きる力に參ぜしめ得ず、またそのやうな資格無きものとして不當に日本文學を理解して來た國民全體も亦その責を問はねばならぬ。

就中、今までのところ、國文學界などよりも遙かに強力な教化力を國民大衆に對して持つ評壇・文壇の文藝批評家も亦、右の點に關して、果して怠慢でなかつたかどうかを反省せねばならぬ。もともと日本文學は國文學徒だけの專有物では無かつた筈である——。「國文學はわれらの生活にとつて無用である」と放言することき文藝批評家を往々見うけるが、かゝる者がどうして文藝批評家たる資格に値しよう。彼の言ふ國文學が日本古典文學を指すのならば尙更のこと。それが國文學徒の行ふ日本文學研究を指すのならば、既に述べたやうな意味で、一應是認してもいいのだが、しかし、かゝる僞文藝批評家が實際上豫想する日本文學研究は、思想無く論理の無い空疎な欲しい儘な獨斷を、美辭麗句の唐草模様で覆うた放埒無殘な文壇製の作家作品研究に他ならぬものであることを注意して置く必要がある。

社會人・文化人・思想人として見た場合の在來の國文學者の弱點を補ひ得るものは、さしあたり、局外の文藝批評家でなくてはならぬ。日本文學を新たに日本人全體の生ける文化財として正當に甦生せしめるためには、とにかくにも文獻學的操作によつて日本文學の一應の整理を爲し遂げた國文學者と、現代日本の知性を代表する筈の文藝批評家とが、それ／＼異質の、離れ／＼の進路を補正し合つて歩み寄り、所謂「國文學」を眞の日

本文學たらしめる爲の、共同の目標のもとに協力することが、今日何よりも必要であると信じるものである。本書のごときも、一國文學徒としての吾々のこの念願による、一つの小さな試みに過ぎない。若く清新な讀者諸氏が、本書によつて、日本文學への正しい愛情を、いさゝかでも加へて下さることとなるなら、吾々のこの上もない仕合せである。

終りにのぞみ、この貧しい企てに對して、極めて好意ある協力を賜つた執筆者諸賢に心からの感謝を捧げる。

昭和十五年七月

千歳烏山の假寓にて

近 藤 忠 義

目次

序に代へて……………近藤忠義

第一部 日本文學研究法

日本文學の理會とその技術について……………高木市之助…三

日本文學研究法……………石山徹郎…九

日本文學研究法の展望……………羽仁新五…一四

第二部 日本文學研究手引

上古文學……………森本治吉…三

中古文學

物語・日記・隨筆……………佐山 濟…二三

和 歌……………窪田敏伏…三五

近古文學

和歌……………風巻景次郎…二五

軍記物語……………永積安明…二五

謠曲……………近藤忠義…二六

お伽草子……………市古貞次…二七

連歌……………井本農一…二八

近世文學

小説……………重友毅…二七

淨璃瑠・歌舞伎……………守隨憲治…三三

俳諧……………中島武雄…三三

近代文學

前期……………鹽田良平…三六

中期……………岩崎萬喜夫…三六

後期……………田中保隆…三六

昭和の十四年間……………宮本百合子…三五

第三部 日本文學研究のために

日本の歴史文學の特徴	長谷川 如是閑……………三二七
日本文學と歴史	羽 仁 五 郎……………三三三
先づ文學の概念を	本 多 顯 彰……………三九四
一傍觀者の言葉	樺 俊 雄……………三九六
日本文學の廣さと狭さに就いて	三 枝 博 音……………四〇〇
古典について	清 水 幾 太 郎……………四〇九
古典文學への一般の無關心について	澁 川 曉……………四二七
現代における國文學者	福 田 清 人……………四三七
附録 日本文學書目要覽	榊 原 美 文……………四四五

第一部 日本文學研究法

日本文學の理會とその技術について

高 木 市 之 助

日本文學に關心を有つ人達の爲に私は語りたいたく多くのものを有つてゐるが、それ等の事は恐く他の執筆者によつてもつと精到に且つ妥當に語られさうであるから、私としてはむしろ無意味な反覆を避け、研究法と共になければならぬと信ずる、日本文學を理會する上の或特殊の技術について、私自身の經驗を省みつゝ、何か書いてみたい。尤も私の經驗はいつも古典文學を對象としてゐるが故に、以下單に日本文學と言つても實は古典文學に偏したものである事を免れないであらう。

一體文學を理會するといふ事は、よく言はれるやうに、作者の生の體驗を理會者の生によつて追體驗する事に外ならない。そのやうな生の關聯に於て技術の介在する餘地があるかどうかといふ事が既に一應問題であるが、管見に隨へば、吾々が日本文學を歴史的具體的な事象として正しく理會する爲には、技術的訓練も亦必須不可缺であつて、今日多くの學徒達はかうした技術を看過し、時としては、無視さへする事によつて、その妥當な方法論乃至その透徹した文藝論にも係らず屢々作品に對して部分的にも全體的にもその理會を誤り、重大な過失を犯すに至るのである。

技術は方法論ではない。随つて理論によつて規定される代りに經驗によつて習熟されるものである。又普遍的に通用するといふよりも一層個別的に散在してゐるに近い。即ち、日本文學を理會する爲の技術は日本文學研究者の間に彼等の經驗として生れ、又特に日本文學の有つ日本的な性格、更に適切には作者達の創作體驗の有つさうした性格に照應して存在する。随つて以下、かうした技術について私の語りた事も畢竟文學一般に通用する技術論ではなく、特に日本文學に關聯する私自身の經驗に過ぎないのである。

日本文學を理會する上に特に強調したく思ふ技術の一つは理會者が彼自身の自然に對する經驗を練成するといふ事である。一體日本文學が特に自然と緊密な關係にあるといふ事は多くの論者の主張するところであるが、少くとも古典日本文學の作者達が殆ど常にその創作體驗に於て自然關聯に負うてゐる事は事實である。随つてさうした文學を理會する一つの技術として吾々は吾々自身の對自然經驗を活用する事が豫想されるのである。例へば赤人の有名な

み吉野の象山のまの木ぬれにはこゝだも騒ぐ鳥の聲かも

は赤彦の所謂「人生の寂寥所に入つた」集中有數の佳作と評價されてゐるのであるが、本歌をこのやうに理會する事は、集中の前後にある赤人の同時同所の作歌を凝視すれば足るといへばそれまでであるが、他面本歌を最も正しく、或は最も切實に理會する爲の一の技術として研究者自身吉野の象山のまを訪ねて、直接この自然を經驗する事も要請されていゝ。私自身も先年富瀨を訪ひ、象山のまとおぼしきあたりをさまよつてこの歌に

於ける赤人の心境を一層はつきり感得した經驗を有つてゐる。尤もこの場合經驗は作者の歌枕そのものを訪ねなければならぬとは限らないのであつて、例へば「笹の葉はみやまもさやにさやげども」といふ入麿の悲情を理會する爲に人は必ずしも石見の國に高角山を訪ふには及ばないが、唯時處はともかくも、笹の葉がみやまもさやにさやぐといふ自然の一つの相は自己の直接經驗として獲得すべきであり、「妹がみし楊の花は散りぬべし」と日本挽歌の作者がうたつたところで、現實に「妹が見」た楊を一千年後の吾々が求め得る筈もないのであるが、唯本歌の理會を意圖する人々にとつて、少くともそこ、に咲きかつ散る楊の花を直接經驗として眺めるといふ事だけは、必須でなくとも望ましい事であらう。要するに大は一郷土一風土から小は路傍の一本一草のさゝやかな姿に至るまで、苟も作者が、そこにさも日本の文學らしく、自己の生を托してゐる以上、理會の側にある者も亦、さうした自然に對する自己の直接經驗を豊富にする事によつて少くとも一層切實に理會する事が出来るのである。尤もかう言つてしまへば、それは技術として極めて單純容易な事のやうに考へられるが、事實は必ずしもさうでない。なぜなら日本文學に於ける自然關聯は言ふまでもなく誠に複雑隱微であつて、同じ表現關係に於ても時に全く逆の方向にある事さへあるからである。例へば前掲赤人の歌に於て實在の象山の際はいかにも赤人の心境を想はせて閑かに靜もりかへつてゐるが、憶良が日本挽歌に於て

大野山霧たちわたる我が嘆くおきその風に霧たちわたる

と嘆いた大野山を吾々は必ずしも彼の湧き立つやうな憂鬱を托するにふさはしい山として經驗するとは限らない。(人によつてさうでない場合もあるかも知れないが、假りに一つの例としてかく定めるならば)赤人の生は